

松岡完著

『ケネディと冷戦——ベトナム戦争とアメリカ外交』

(彩流社、2012年)

『ケネディとベトナム戦争——反乱鎮圧戦略の挫折』

(錦正社、2013年)

寺 地 功 次

著者の松岡完氏は、1988年に出版された『ダレス外交とインドシナ』以来、一貫してインドシナ紛争に対するアメリカ合衆国の政策を地道に研究してきた。『ダレス外交とインドシナ』は、当時新たに公開された公刊・未公刊の外交文書や既存の研究、当事者の回顧録などを駆使して1950年代のドワイト・D・アイゼンハワー政権のインドシナへの関与を綿密に分析した研究であった。その後、旧ソ連や中国、ベトナムなどの史料が一部公開され新しい研究も出てはいるが、いま読み返してみても、日本でのこの先駆的な研究はきわめて参考になる。アメリカ及び同盟国の政策の根幹に関する分析ばかりでなく、中ソや現地インドシナの動向、その他当事者の証言や細かな事実についても、著者の研究や同じ頃に欧米で出版された研究で明らかにされていたことは多い。

その後、著者は『20世紀の国際政治』、『冷戦史』(共著)という大学生・一般向けの概説書、『ベトナム戦争』、『ベトナム症候群』という新書版の研究を発表しながら、1999年には『1961ケネディの戦争——冷戦・ベトナム・東南アジア』という700ページを超えるジョン・F・ケネディ政権のベトナム政策に関する詳細な研究を発表している。この研究は「ベトナム戦争の重要な分岐点」と著者が考える1961年に焦点を当て、ケネディ政権におけるベトナムへの介入拡大の過程を詳細に分析している。一般的には1961年にベトナム戦争が開始されていたという見方はとらないことが多い。しかしこの研究は、ケネディ政権が1961年に実際に行ったさまざまな決定がアメリカの抜き差しならない介入への道(著者によれば「愚行の機」)を開いた過程をつぶさに再検証し、いかに大きな負債がリンドン・B・ジョンソン政権に遺されたかを説得力のある論証で明らかにした。

『ダレス外交とインドシナ』からこの書評で取りあげる2冊の研究書に至るまで、著者の研究アプローチや歴史叙述のスタイルには一貫した特徴がある。ひとつは、公刊された外交文書や大統領図書館等の未公刊文書のみならず、当事者の回顧録、同時代のジャーナリスト・研究者の本やそのときどきの最新の研究などを幅広く丹念に追いかけて活用している点である。英語で出版された研究でも著者の研究ほど多種多様で多くの文献を活用しているものはあまりない。むしろ最近の研究には、マルチアーカーカヴァルな研究や独自のアプローチに取り組むあまり、当時の文献や既存の研究、回顧録等を十分に活用できていないものもある。著者のある意味で伝統的な、しかし徹底した取り組み方は、「ケネディ崇拜者」であった著者が、40年来ケネディと名のつく書籍、雑誌、新聞記事などを「片っ端

から」入手してきたことの成果を納得させるものである。巻末の膨大な参考文献もこのことを物語っている。

もうひとつの特徴は、著者の「語り」である。著者は、大統領をはじめとする米政策形成者、各国首脳や当事国の中で展開されるドラマを、いわば「登場人物」たちの考え方、発言や回想、そして政策の相互作用を丹念に分析しながら巧みに描く。評者の自戒も込めて言えば、そこでは何年何月何日のNSC文書あるいは会議ではといった外交史研究によくあるような無粋な記述はほとんど見られない。それに加えて著者は、章・節・小見出しに工夫したタイトルをつけて巧みに読者を導くことにも長けている。しかし、レトリックに走りすぎるといってもなく、実際には文献を綿密かつ適切に分析して議論は展開されている。

もっとも、このような著者の研究の長所に若干の副作用がないというわけではないだろう。多くの文献を活用して当事者の発言のぶれや矛盾（ケネディの場合は特有の優柔不断さも）、政権内での対立などをていねいに描き、著者の主張を裏付ける事実を順番に提示するため、叙述はどうしても長くなる。著者の文章は洗練されたとてもわかりやすいものであるが、ベトナム戦争やこの時期の外交史にあまり詳しくない読者は、提示される膨大な証言や事実に圧倒されるかもしれない。

2012年8月に出版された『ケネディと冷戦——ベトナム戦争とアメリカ外交——』は、著者によれば、「ベトナム戦争と冷戦をめぐるケネディの認識と行動、その外交政策の特徴を、政権後半、とくにこの重要な一九六三年に焦点を当てながら、三部構成で振り返る」(26) ものである。第1部「冷戦の熱き戦場」では、「冷戦緩和」にもかかわらず、なぜケネディ政権がベトナム介入の拡大へと突き進んだかが考察される。第2部「撤退をめぐる煩悶」では、ケネディ自らが増派した米軍事顧問のベトナムからの撤退問題をケネディらがどのように考えていたかを検討し、1963年の段階的撤退計画の問題点、ベトナム側の米軍撤退要求への対応や米国内政治における拘束要因を分析している。第3部では、和平交渉・中立化提案に対するケネディ政権の対応、ラオス中立化の挫折とベトナム政策との関係を論じている。

本書は、『1961ケネディの戦争』と同様、「もしケネディが生きていたら」という仮説をめぐる論争に著者なりに答えることも主題としている。正直に言えば、本書を最初に手にとったとき、前著でケネディの介入拡大政策がその後の泥沼のベトナム介入をいかに規定するものであったかを十二分に実証したのに、なぜもう1冊本を書かなければいけなかったのかと疑問をいだいた。しかし、この疑問は本書を読み進めていくうちに解消する。1961年を中心として介入深化の動機や具体的事実を跡づけても、ケネディが生きていて1963年に提案された段階的撤退計画を実施すればその後起こった悲劇的な事態はもたらされなかったという、ケネディ擁護論者らの主張に必ずしも反駁したことにはならない。このような主張がある以上、撤退を最初から実現不可能な選択肢として片付けるのではなく、撤退計画を実施する意図や可能性が本当にあったのかどうかを史料に基づいて改めて吟味しなければ歴史の検証は完結しないからである。本書は、いわば『1963ケネディの戦争』とも言える本である。

ケネディ責任論に関する本書の最終的な結論は、たとえケネディにベトナムからの離脱

を望む気持ちがあったとしても、その可能性はほとんどなかったというものである。これに関わる個々の問題は、第2部、第3部の各章でひとつひとつ検証されるが、以下ではまず第1部からの著者の具体的な議論を紹介したい。

第1部では、ベトナム介入を促進させたケネディ政権の「冷戦」意識が論じられる。ここでは、対ソ関係における「冷戦」状況の緩和にもかかわらず、ケネディ政権の考え方においては、発展途上国、とりわけベトナムはソ連との「冷戦の主要舞台」であることになりなかつたことが示される。そして「共産主義一枚岩の神話」を根強く信じる彼らにとって、アジアではソ連以上に中国の存在が大きかった。ベトナムは「米中決戦の舞台」としても意識され、「自由世界の橋頭堡」としてのベトナムを守り抜くべきという意識が戦争拡大の推進力になったと著者は論じる。同時に、ケネディらはベトナムの紛争がハノイからの侵略であるという見方に拘泥し、戦争の現実を見ることを避け、ハノイからラオス、カンボジアを経由する南ベトナムへの人員・物資の浸透を遮断することが勝利への道だと信じ、「力による紛争解決」を求めようになったのである。

このような分析を踏まえて、第2部では、ケネディのベトナム撤退論の検証が行われる。まず著者は、ケネディがベトナムから撤退したはずだとする主張が状況証拠に依拠しており、ケネディ自身の撤退発言もごく少数の側近や友人の回顧に限られ、しかもそれらはベトナム戦争が不評になった1960年代末前後に出てきたことを指摘する。またこれらはケネディの他の発言とも整合性がなく、「本当に出て行く決意の吐露」とするには疑問があり、現実にとった介入拡大路線とも他のほとんどの政権中枢の指導者の主張とも乖離していたことを著者は指摘する。

次に著者は、1963年春から検討され始めたベトナムからの段階的撤退計画にどれほどの現実性があったのかを検証している。10月に1000名の米軍撤退の決定が下されたという事実はあったが、著者は次のような点でこれがケネディがベトナムから撤退したはずだという主張には必ずしもつながらないことを論じている。まず、1000名の引き揚げが政策的にも実現可能性という意味でも全面的な撤退に直結するものでなかつたこと。またこの引き揚げの決定の発表には、介入拡大に杵をはめることやジェム政府への圧力といった隠された意図があったとも推測でき、国内的には米国民に対して成功をアピールする意図もあったこと。実際、1000名という数字は発表されても、現実の米軍事顧問の数は秘匿されていたし、その後1万6500名という数が発表されたのも1000名撤退の発表よりはあつた。何よりも、ケネディ政権内で1000名撤退後の具体的な段階的撤退計画が完成していたとは言えず、「有利な戦況、南ベトナム政府軍の強化、北ベトナムの自制などに支えられた、じつに危うい計画だった」(218)と著者は主張する。

このように撤退計画がほぼ破綻したものであつたことを立証したうえで、著者は、1963年に南ベトナム側から出てきた米軍撤退の要求に対するケネディ政権の対応を分析する。政権運営に対するアメリカ側の厳しい批判やアメリカの過剰関与に憤ったジェム政府からは、この年の春以降、米軍事顧問に対する批判や米軍撤退さえも求める声が噴出した。これはケネディ政権にとって、「アメリカがベトナム喪失の責めを彼らベトナム人に負わせ、政治的損失を最小限にとどめながら出て行ける道」(239)を開く「好機」であつた。しかし、著者の周到な分析は、ケネディも含めた政権関係者が夏から10月にかけて繰り返しベトナムからアメリカの撤退はないことを公的な発言で述べていたこと、政権内部の議論でも

東南アジアのみならず世界で共産主義に対峙するアメリカの威信に対する考慮からベトナムでの勝利を追求する主張が圧倒的だったことを証明する。ここでも第1部で分析された「冷戦論理」が作用し、著者によれば、ケネディは「みずからその道を塞いでしまう」(239)のである。

第2部の最後では、ケネディのベトナム撤退論に対する「米国内政治の制約」が分析される。著者は、ケネディが1964年の大統領選挙で再選されるまではベトナムから撤退できない、しかし再選後ならできるといふ主旨のことを側近や友人に語っていたことを紹介する。しかし当時の世論や議会にはジレンマはありながらも戦争を支持する意見が強く、米国内政治の他のさまざまな制約もケネディを拘束していたことを著者は説明する。また著者によれば、ケネディができることには限りがあっただけでなく、ケネディ自身も1963年に撤退を国民に受け入れさせるような努力をしていたとは言えなかった。

第2部までの分析で著者は、ケネディの撤退論や「ケネディが生きていたら」をめぐる論争に対する実証的な反論を十分に行っていると言える。しかし著者の論証はまだ終わらない。第3部では、アメリカの一時的な撤退とは異なる、交渉による解決という選択肢に対して、ケネディ政権がどのような対応をとったかが分析される。そして、ここでもケネディらがこれらの選択肢を明確に退けたことが明らかにされる。具体的には、1963年5月のハノイによる和平呼びかけや8月のドゴール仏大統領によるベトナム中立化構想、1962年から始まっていたハノイ＝サイゴン秘密交渉である。またケネディ政権からすれば、1962年に交渉により達成されたラオス中立化の枠組みはベトナムには役に立たないものだった。著者によれば、ケネディらは、ベトナムはラオスと大きく状況が異なりそもそも中立化がベトナムに適用できると考えていなかった。また1963年になると「成功」経験だったはずのラオス中立化の枠組みも崩壊し始め、「ラオスのトラウマ」はむしろ共産側との交渉や合意に対する不信感を増大させ、紛争の背後にある北ベトナムに対する強硬な姿勢をアメリカが強めることに寄与した。最後に、米ソ緊張緩和の進展にもかかわらず、モスクワがラオスの共産主義勢力やハノイを制御できないことへの失望やベトナム問題に関してソ連からの十分な協力姿勢を得られないという事実は、著者によれば、「ケネディ政権のベトナムへの対応にも重大な影響を与えた。」(353)

著者は、本書全体を通して、側近などのケネディ擁護論者の主張を取るに足らぬものとして片付けることはせず、その主張をひとつひとつの章で取りあげていねいに反論を加えている。本書を読み進めていくに従って、パズルがひとつひとつ解けていくような小気味よさ、あるいは推理小説を読むようなおもしろさを感じる。著者の堅実な論証と主張はたいへん説得力のあるものになっている。

本書では「ケネディの」、「ケネディが」といった表現が多用されている印象は残るが、全体の分析はケネディ個人ではなくケネディ政権全体の政策や動きをよく検討したものとなっている。ケネディ政権内部の主要な政策形成者の見解や残された記録をバランスよく緻密に分析し、米国内政治、議会や世論の動きや、ベトナムはもちろん関係諸国との相互のやり取りも著者は十分に検討している。そして本書のタイトルにもある「冷戦」的な思考や枠組みが、著者の言う「介入深化の力学」にいかんか作用していたかを解明する研究にもなっている。これが本書のメイン・タイトルにベトナムという名称が入らず、『ケネディと冷戦』とされている理由でもあろう。

ケネディ政権のベトナム介入に対する著者の緻密で執拗な追求は、英語の陳腐な表現を借りれば、アーリントンの墓のなかでケネディに「寝返り」をうたせ、ケネディが安らかに眠ることをなかなか許さないものである。(ケネディ論争に終止符を打ち、安らかに眠らせることが意図されている可能性もあるが……。)『1961ケネディの戦争』と『ケネディと冷戦』の両方を読んだ読者は、著者の圧倒的な論証に納得し、これで十分と感じたことだろう。しかし、著者の追求はこれで終わりではなかった。ケネディ暗殺から50年を迎える2013年には『ケネディとベトナム戦争——反乱鎮圧戦略の挫折』が出版される。ケネディ暗殺の11月ではなく2月の出版ではあったが、白とグレーの漆喰面のような表紙のタイトルでは「ベトナム戦争」という文字だけが赤字になっている。総ページ数で言えば、480ページほどの前著をさらに上回る540ページにもなる多くの文献を駆使した大著である。やはりケネディは眠らせてもらえそうにない。

但し、『ケネディと冷戦』もそうだが、『ケネディとベトナム戦争』もたんなるケネディ本と見なすことはできない。評者自身は、本書の副題「反乱鎮圧戦略の挫折」を見たときに思わず唸りたくなった。というのは、1950年代以降のアメリカの対東南アジア政策に関する膨大な史料と格闘して研究する際、論文をひとつ書くたびに、十分に論じきれなかった、この時期については別に論文を書くべきではないかという思いが残る経験を何度もしてきたからである。政治外交史的に米政府内での検討や主要な政策形成者の見解、現地代表部とのやり取りを跡づけ分析するだけでは、現地で米政府関係者や米軍人らが国内安全保障 (internal security、国内治安) 面や内戦状況でどのような軍事的、政治的活動を展開し介入を深めていったかがなかなか描ききれない。しかし、東南アジアを始めとして発展途上国でのアメリカの関与においては、このような軍事・非軍事の両方の側面、そして反乱鎮圧や情報宣伝活動といった側面は重要である。現地で展開された抜き差しならない関与が往々にしてアメリカの軍事的関与を深め、アメリカの政策を拘束することにもなるからである。

著者は、本書で明らかにされる特徴や問題は、ベトナム後、冷戦後のアメリカの対外介入にも共通するものと考えている。とりわけ、「責任転嫁、自己過信、知識欠如」という「戦争政策の破綻に表出したケネディ外交の特質」が今日に至っても教訓とすべき限界であることを著者は結論として強調する(9)。本書は、ベトナム戦争の研究というだけでなく、このような意味でも重要な貢献である。あえて一冊の研究として出版した意義は大きい。実際、これほど緻密に外交文書等を追いながら反乱鎮圧戦略という観点からケネディ政権期の軍事戦略と政治・経済・社会・心理などの分野の非軍事戦略、その背景にある考え方を幅広く多面的に分析した本は、英語でもないのではないかと思う。

本書も3部構成となっている。第I部では、民兵・警察も含む南ベトナム政府軍の強化に焦点を当ててアメリカの圧力、傲慢さと失敗を描いている。アメリカ式戦争の実験室として、ケネディ政権期のヘリコプター戦争や枯葉作戦の開始も分析されている。第II部では、南ベトナムにおける「政治戦争」の展開が検討されている。「戦略村」、「チュウホイ計画」、「民間非正規防衛隊」などの試みの展開と失敗を検証し、軍事的戦いと非軍事面での戦いのせめぎ合いのなかでいかにアメリカの対応が軍事化の度合いを深めていったかが立証されている。第III部では、アメリカによる現地の軍事情勢や政治危機に対する把握状況にいかにか欠陥や自己欺瞞があったかが明らかにされている。そして、ケネディ政権は、

ベトナムで繰り返られていた失敗を直視できず、責任をジェム政府に転嫁し、自己過信と傲慢さから、対処すべき現実やゲリラ戦争の特質、ベトナムの風土などへの無知を是正することなく介入を拡大したのである。

本書で印象的だったのは、あらゆるところで軍事と政治（あるいは非軍事）の結合の重要性が繰り返しケネディ政権内で語られていたことである。それにもかかわらず、実際にはこのような結合は実現されず、アメリカの関与は軍事偏重の介入へと傾斜することの繰り返りだったという指摘には改めて驚く。本書の分析は、『ケネディと冷戦』で著者が実証した段階的撤退計画の実現の困難さを、ケネディらの反乱鎮圧戦略への拘泥と軍事介入の深化、現地情勢への無理解などの証拠によってさらに立証していると言える。

著者は、概説書などでときに見られる反乱鎮圧戦略やその他の政策がケネディ政権で始められたかのように考える誤解を正す努力も本書の随所で行っている。ベトナムへの本格的軍事介入過程の分析としてケネディ政権を中心に論じるのは当然だが、この辺の配慮は重要であり、1950年代に始まったこの種の政策についてもきちんと言及している。あえて言えば、このような軍事・反乱鎮圧戦略の側面やその歴史にあまり詳しくない読者のために、1950年代の反乱鎮圧戦略の形成と実践がひとつの章で最初に分析されていると、戦後アメリカ外交におけるこの種の政策の重要性をより理解するうえで適切だったのではないかとは感じる。

著者の膨大な研究を読みこなすには、洗練されたわかりやすい文章で書かれているとはいえ、扱う史料・文献が膨大で研究が緻密であるがゆえになかなか時間がかかるかもしれない。しかし著者の研究姿勢や叙述方法は、アメリカ外交史のみならず他国の外交史や国際関係史を研究する者にも広く参考になる。ぜひとも多くの研究者に著者の分厚い研究書と格闘してもらいたい。